聖　書：コリント人への手紙第二 3：7〜18
説教題：栄光から栄光へと
日　時：2024 年 10 月 20 日（朝拝）

コリント人への手紙第二はパウロが使徒としての自らについて弁明している書です。それはコリント教会にパウロを批判し、彼を使徒として認めない人々がいたからです。これが単なる個人の名誉の問題だけならパウロは放置することもできますが、パウロの否定はパウロが神から委ねられて伝えた福音の否定にもなります。コリント教会設立の働きも全部水の泡となってしまいます。そこでパウロは自らの弁明をいわば強いられているわけです。彼はこの弁明を通してコリント人たちが福音をさらに良く理解し、一層神の救いの祝福に生きる者となることを願っています。

今見ている 3 章もパウロへの批判が背景にあります。1 節から伺えることは、パウロは他者からの推薦状を持って来なかったということで彼を批判する人たちがいたということです。推薦状もないような人を信頼するわけには行かないと。そんな人々に対してパウロはコリント教会の存在そのものが推薦状であると答えました。神の力と導きによってパウロはコリント教会を設立しました。そこにパウロが神の使徒であることが証明されていること、そして自らは新しい契約に仕える者とされたことを彼は述べました。この新しい契約については先週見ましたので今日は詳しく繰り返しませんが、旧約の預言者エレミヤの言葉に基づくものです。将来、約束のメシアが来て待ち望まれた罪の赦しを与え、ついに神とその民が一つに親しく結ばれる日が来る！と。それはイエス様の十字架のみわざが行われて、ついに与えられるものです。旧約時代の様々ないけにえの規定が指し示していたまことのいけにえであるイエス様がささげられて、この方を信じる者はみな全き罪の赦しを得るようになります。そしてイエス様は復活して天に昇り、天から聖霊を遣わして、エゼキエル書などが預言した聖霊が豊かに注がれる祝福の時代が訪れるようになります。この新しい契約に仕える務めをパウロは神から与えられ、その奉仕の実としてコリント教会があります。パウロはなお、この新しい契約に仕える務めの栄光について今日の箇所で語ります。

引き続き、引き合いに出されているのはそれまでの古い契約すなわち旧約時代のモーセに代表される契約です。7 節に「石の上に刻まれた文字による」とありますが、これは前回も出て来たモーセの十戒、律法のことですね。神はモーセに十戒の文字を

刻んだ石の板を与えました。その古い契約、旧約時代に与えられていた務めも栄光あるものです。ここに「モーセの顔にあった消え去る栄光」とありますが、これは出エジプト記 34 章 29～35 節に記されたことを指しています。モーセがシナイ山で主から律法を受け、2 枚の板を手にして降りて来た時、モーセは主と話したために、その顔の肌が輝きを放っていました。それを見たイスラエルの子らはモーセに近づくのを恐れました。モーセは彼らを呼び寄せ、主が自分に告げたことをことごとく彼らに命じました。これがいかに栄光を帯びたものだったかをパウロは思い起こさせています。人々はこの栄光のため、モーセの顔を見つめることができないほどでした。しかしそれがここで「死に仕える務め」だと言われています。前回の 6 節最後に「文字は殺し、御霊は生かす」とありました。石の上に刻まれた文字、すなわち律法はそれ自身良いものですが、私たち人間が悪くてそれを守れないため、律法は私たちを断罪するのみです。私たちを死に定めるのみです。そのような以前の古い務めもモーセの顔に見られるような栄光を放っていたなら、御霊に仕える新しい契約の務めはもっと栄光を帯びたものにならないでしょうかとパウロは問います。文字は殺すが、御霊は生かします。神は新しい契約において律法を人の心に置き、御霊を与えて、私たちが喜んでこれを行う力をも与えてくださると言われました。とするなら御霊に仕える務めはさらに優れたもの、さらに栄光を帯びたものではないかということです。

9 節以降も同じです。古い契約に仕える務めは「罪に定める務め」と言えます。それでもあのような栄光がありました。しかし新しい契約は「義とする」祝福を人々にもたらします。イエス様の人としての完全な生涯と身代わりの十字架によって、イエス様を信じる人は罪の赦しばかりか、イエス様と結ばれて義と認められると福音は語ります。ですから新しい契約に仕える務めの方が一層栄光に満ちていることになります。10 節に「実にこの点において、かつては栄光を受けたものが、それよりさらにすぐれた栄光のゆえに、栄光のないものになっているのです」とあります。暗い夜の街灯は私たちを大いに助けます。安心を与え、希望を与えてくれます。しかし太陽が昇ったら、あれほど明るく輝き、助けとなった街灯はほとんど意味がなくなります。それと同じようにモーセの時代の栄光は素晴らしいものでしたが、今や新しい契約がもたらす栄光ははるかにまさり、以前の輝きを栄光のないものにするほどだと言うのです。

そして 11 節。ここで古い契約における栄光は消え去るべきものと言われています。

モーセが主の前に出ると彼の顔は輝きを放ちましたが、それはいつまでもは続きませんでした。時間が経てば消えました。しかし新しい契約の栄光は永続します。とするならこちらの務めの方がはるかに栄光に包まれているとパウロは言います。

そして後半の 12 節に続きます。「このような望みを抱いているので、私たちはきわめて大胆にふるまいます。」　古い契約の栄光にはるかにまさる光の中に立たされている者として、パウロは大胆に振る舞うと言います。確信に満ちて奉仕すると言います。この点でモーセと違うとまでパウロは言います。13 節でパウロは先ほどのエピソードをさらに取り上げて、モーセは「消え去るものの最後をイスラエルの子らに見せないように、自分の顔に覆いを掛け」たと言います。モーセが顔を覆ったのは光が消えるのを見られないようにするためであったと。ある人は果たしてそうだっただろうかと思うかもしれません。モーセが顔に覆いをかけたのは、そうしないと人々がまぶしくて耐えられないからではなかったのかと。しかし出エジプト記を良く見ると、そうは書いていません。出エジプト記 34 章 30 節を見ると、確かに人々はモーセの顔が輝くのを見て、近づくのを恐れました。しかしモーセは彼らを呼び寄せて、主が告げた言葉を語りました。そして彼らと語り終えた後で顔に覆いをかけました。つまり覆いは栄光を隠すためのものではなかったのです。34 節以降でも主の前に行く時、モーセは覆いを外し、外に出て来るまでそうしたとありますが、外に出て主の命令をイスラエルの子らに告げた時、人々はモーセの顔の肌が輝きを放っているのを見たと書いてあります。彼らはモーセの輝く顔を見たのです！その話が終わった後で彼は顔を覆いました。なぜこんなことをしたのでしょうか。出エジプト記にははっきりその理由は書かれていません。しかしパウロによれば、それは栄光が消え去る様子を隠すためだったと言います。その最後を見せないようにするのです。こういう意味でモーセに与えられた務めには、その栄光が一時的なものであることに由来する消極性があったのです。いつまでも続く栄光が今ここにあるわけではないことを知ることから来る消極性です。ですからこれはモーセが悪いという話ではありません。これは当時に生きていた神のしもべの限界です。輝かしい栄光を垣間見てはいますが、それはまだ永遠のものではないのです。その輝きが消え去る前に、その様子を見せないために、モーセはそれを覆いました。そういう時代だったのです。この点で新約の光の内にあるパウロは大胆に振る舞うことができる立場にあると言っています。

パウロは続けて同じイメージを用いて、イスラエルの子らの心には同じ覆いがかか

っているままだと言います。旧約時代にモーセが消え去るものの最後を見せないように覆いをつけたように、イスラエルの子らがその栄光は最後にどうなるのか良く分からない状態、覆いがかけられた状態にあることはやむを得ないことです。しかし今やイエス・キリストが現れました。14 節最後に覆いを指して、「それはキリストによって取り除かれるもの」とあります。つまり律法は来たるべきイエス・キリストを指し示していました。このキリストに到達して初めて律法の意味は分かり、覆いは取り除かれます。すでに見た 1 章 20 節でパウロは、神の約束はこのイエス・キリストにおいてことごとく「はい」となった、Yes となったと言っていました。このキリストにおいてこそ、神の答えが明らかにされています。この方に到達してこそ覆いは外され、すべてがすっきりします。しかしユダヤ人はこのキリストに心を向けないため、いまだにその心には覆いがかかっていると言います。モーセの書が朗読される時、キリストと結び付けて聞かないため、いまだに覆いがかかった、ぼんやりとした状態にあり、永続する栄光を見出していないのです。

どうすれば良いでしょうか。その答えが 16 節以降にあります。それは主に立ち返ることです。イエス・キリストに心と体を向けることです。その時、心にかかっていた覆いは取り除かれます。そこにおいて人は旧約が指し示していた真の神の栄光、いつまでも消えることがない永遠に続く栄光に導き入れられるのです。

17 節に「主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります」とあります。イエス様は聖霊を豊かに注がれて地上で贖いの働きを成し遂げ、今や天に昇って聖霊を豊かに注ぐことができる方となられました。イエス様＝御霊と言っても良いほどに、イエス様は御霊を私たちに遣わしてご自身が勝ち取った祝福を私たちに当てはめてくださるお方です。その御霊のあるところには自由があると言われています。御霊がくださる祝福の一つの特徴は、この「自由」です。色々な自由が考えられます。律法の責めからの自由、死の恐怖からの自由、罪の支配からの自由、また神に大胆に近づく自由、神の御心（律法）を喜んで守り行う自由、・・・。しかしここでは特に 14 節の「大胆さ」との関連を考えるのが良いと思います。モーセはその置かれた時代的制約ゆえに抑制的であり、消極的であり、ある種の制限がありました。しかし今や新しい契約に仕える者たちには、この御霊が与えてくださる自由によって、それまでには見られなかった大胆さや確信や喜びを持つ者たちとされているのです。

そして最後の 18 節。モーセが顔の覆いを外して主と向き合ったように、私たちも覆いを取り除かれて主に向き合います。古い契約においてこの特権にあずかったのはモーセ一人でしたが、新しい契約においては「私たちはみな」とあるように信者全員があずかります。次の「鏡のように主の栄光を映しつつ」という部分は、欄外に記されている別訳のように「主の栄光を鏡に映すように見ながら」と理解する方が適切であると多くの学者は言っています。私たちが主の栄光を鏡のように反映するというよりも、私たちが主の栄光を鏡に映すようにして見るという点にここでは力点があると。今はまだ直接主を見ることはできませんが、福音を通して鏡に映すようにして見るのです。どちらの解釈を取るにせよ、このことを経て結果的に私たちが「主と同じかたちに姿を変えられて」いくというメッセージに変わりはありません。主に心を向け、主と交わるプロセスを経て、私たち自身がキリストに似る者へと造り変えられて行く。これが私たちの救いの目標です。人間は初め神のかたちに造られたと創世記は記しています。アダムは罪はありませんでしたが、神のかたちを益々発展させて最終状態に至るようにという道のりの最初に置かれました。しかし罪を犯して堕落し、神のかたちは著しく損なわれ、傷つきました。しかし聖書でキリストこそ真の神のかたちであると言われています。そのキリストと結ばれ、キリストに似せられて行くことを通して、私たちは本来の人間性を回復して行くのです。そして神が最初にご計画なさった神のかたちの最終状態、そのゴールに達するようにと導かれて行きます。ここの「変えられていく」という言葉は現在時制で語られていますから、日々変えられて行くという意味です。また「栄光から栄光へ」という表現も、これが一瞬で完成に至るものではないこと、だんだんと、漸進的に、継続的に発展・進歩すべきものであることが言われています。このプロセスを経てついに最後にイエス・キリストに全く似た者とされます。ヨハネの手紙第一 3 章 2 節 :「愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。」　その日、私たちはイエス様の栄光に輝く姿を初めてありのままに見て驚き、喜びますが、何とその時に私たち自身もそのイエス様に似た者とされていることを発見するというのです。これは何という信じられないような、喜ばしい聖書のメッセージでしょうか。これは御霊なる主の働きによります。新しい契約はこのような祝福を私たちにもたらし、私たちを生かすのです。

以上のことから短く 2 つのことを述べて終わりたいと思います。一つは私たちは今

日もこの 18 節に述べられた祝福の中に生かされているということです。私たちはイエス・キリストを信じて終わりではありません。イエス様を信じて罪を赦され、さばかれないと知って終わりではありません。私たちの前にはイエス様に益々似る者とされる道が用意されています。これが聖化の目標です。神のかたちの真の回復です。これはキリストに向くことを通して私たちに実現されて行きます。モーセが顔の覆いを外して主と会ったように、私たちもそのようにキリストに向かい、キリストの言葉を聞き、キリストと交わることを通して、この歩みを導かれたいと思います。御霊がこの歩みを最後まで導いてくださいます。その御霊に信頼し、感謝して、この新しい契約の祝福に益々豊かに生きる者たちとされたいと思います。

もう一つはなぜパウロは今日の箇所のことを述べたのかに関係します。彼はここで新しい契約に仕える務めがいかに栄光を帯びたものであるかを語りました。なぜこのことを語ったかは、次の 4 章 1 節に目をやるとはっきりします。「こういうわけで、私たちは、あわれみを受けてこの務めについているので、落胆することがありません。」パウロは使徒として多くの苦難の中にありました。その苦しみのためにコリント人から見下げられ、使徒としてふさわしくないなどと言われていました。この後もパウロが受けた苦難について色々述べられます。そういう中にあっても彼が落胆せずに奉仕できた秘訣は何だったのでしょうか。それは、この新しい契約に仕える務めがいかに栄光に満ちたものであるかを彼が深く心に留めていたことです。旧約のモーセの時代の栄光にはるかに勝るものだからです。ですから彼は落胆しないと言うのです。12 節にあった通り、むしろ大胆に、確信をもって、御霊により、この務めに当たるのだ！と。私たちも同じだと思います。私たちは使徒ではありませんが、この福音を伝え行くべき者たちです。その私たちにも主に従って歩むなら色々な苦難は避けられません。しかし私たちがパウロと同じくあずかっているのは、人を殺すのではなく、生かす福音です。栄光に輝く主と顔の覆いを取りのけられて向かい合って、栄光から栄光へと御霊によって変えられ、ついには主に似た者となるまで造り変えられて行くという一大目標に向かう福音です。この栄光ある務めを心か感謝して、落胆することなく、私たちの周りの方々にこの良き知らせを伝えるわざに励む者たちでありたいと思います。新しい契約の祝福の素晴らしさを自らの身をもっていよいよ味わい、どんな苦難の中でも勇気を失うことなく、私たちの生活と言葉をもって大胆に証しする務めに励む者とされて行きたいと思います。